

Women in Love における Gerald Crich

中 野 喜 美 子

序

日進月歩の勢いで発展する近代社会の中で、我々は機械的に毎日を送っている。あわただしい毎日の生活から開放され、ほっと一息つく時、わけもない空虚感にとらわれ、寂しさを感じることがある。これは Lawrence の予言した機械文明に従事する人々のたどりつく道である。*Women in Love* における Gerald もそのような悩みを抱く。これから述べる作品の Gerald は我々の中にも生きている人間の姿ではないだろうか。

(1) *Women in Love* について

(a) *The Rainbow* と *Women in Love* との比較

最初は *The Sisters* と題する長篇の前半が、*The Rainbow* で、*Women in Love* はその後半になっていた。けれども、二つの作品をくらべてみると、関連性の少ないのに気づく。Ursula が *The Rainbow* では、Lawrence の代弁者としてあらわれていた。*Women in Love* においても彼女は現れるが、*The Rainbow* におけるほど顕著ではない。しかし、*Women in Love* においては *The Rainbow* と異なり、成人した女性として現れ、時々 *The Rainbow* に述べられた娘時代を回想する場面が出てくるので、その点、関係がある。*The Rainbow* は三代にわたる家族の年代記であった。けれども *Women in Love* の場合は Ursula とその妹 Gudrun, Birkin とその親友 Gerald という二組の男女が中心になるので、主題も *The Rainbow* よりは緊密になり、迫力が感じられる。Graham Hough は *The Dark Sun* で次のように述べている。

「この小説は Ursula と Gudrun との結婚についての会話から始まっている。これは *The Rainbow* と同様に中心となる主題である。しかし、ここでは結婚はできあがった制度としてではない。それは、二人の冒険好きな、高い教養ある若い女性が一体、結婚は可能であるかどうかを見い出そうとする試みである。*Women in Love* では、*The Rainbow* で是認されていた結婚という制度を、実際、疑がってかかるのである。」¹⁾

(b) *Women in Love* の特色

The Rainbow についてもいわれることであるがこの作品においても従来の小説とちがった手法を用いている。Lawrence は 1914年 6月 5日付けの Edward Garnett にあてた手紙において、

You mustn't look in my novel for the old stable *ego* of the character. ... (Like as diamond and coal are the same pure single element of carbon. The ordinary novel would trace the history of the diamond—but I say, “Diamond, what! This is carbon”. And my diamond might be coal or soot, and my theme is carbon.)²⁾

と述べている。Lawrence は従来の小説家が追求した知性、意志、精神、肉体をもった個性よりも、何か非人間的なものを追求した。彼は「個性はたいして興味はなくて、全ての人物を生き生きさせるのにすぎない。根本的な要素、すなわち、炭素がある。それは生と死だ。」と考えた。さらに Mark Schorer は次のように述べている。

The relationships of the novel are founded on this opposition, on the idea of death and life and death-in-life; and the characters move

1) Graham Hough, *The Dark Sun*, p. 73. (London, Gerald Duckworth, 1956)

2) A. Huxley, *The Olive Tree*, p. 219. (London, Chatto & Windus. 1947)

entirely in terms of these two impulses, their conflicts and their embraces developing out of their allegiance to one or the other.³⁾

この小説においては life-process を追求するのが Ursula と Birkin であり、death-process を追求するのが Gerald と Gudrun である。

J. Middleton Murry は次のように述べている。

To the working out of this personal argument in the imaginary consummation of Birkin and Ursula, all else is really subsidiary in the novel.⁴⁾

それに対して、F. R. Leavis が *Women in Love* においては Gerald に焦点があたると反駁している。⁵⁾ 私としては Leavis の意見に同意したい。なるほど Murry のいうように、Birkin は Lawrence の代弁者であり、Lawrence の理想境を追求するが、それはあまりに抽象的で理解しにくい。それよりは Birkin の否定者である Gerald の方が生き生きとした精彩を放ち、この作品の主人公ともいえる。彼が死へ向う過程は加速度的で読者を強くひきこむ点がある。それにくらべると Birkin は影が薄い。これから Gerald の死へ向う過程を通して、Lawrence の考えを否定面からみていきたい。

(2)

まず Gerald とはどういう人物かということをも二人の目を通して見てみよう。

Gudrun (彼女は芸術家であり、後に Gerald の恋人になる) は第 1 章の

-
- 3) Frederick J. Hoffman & Harry T. Moore, *The Achievement of D. H. Lawrence*. p. 173. (University of Oklahoma, 1953)
 - 4) J. Middleton Murry, *D. H. Lawrence. Son of Woman*. pp. 118—9. (London, 1954)
 - 5) Cf. F. R. Leavis, *D. H. Lawrence, Novelist*, p. 152. (London, Chatto & Windus, 1957)

結婚式の場面で Gerald をみる。この時、「この男には自分を惹きつける何か北方的なものがある。」⁶⁾ と感じる。

Birkin の方は “Moony” の章で, Gerald について次のように考える。

Birkin thought of Gerald. He was one of these strange white wonderful demons from the north, fulfilled in the destructive frost mystery. And was he fated to pass away in this knowledge, this one process of frost-knowledge, death by perfect cold? Was he a messenger, an omen of the universal dissolution into whiteness and snow?⁷⁾

この二人の考えをまとめると, Gerald という人物の outline がうかがえる。彼は northern ice-destructiveness を持っている。それは冷たさ, 霜, 氷, 雪などを代表し, 彼は白い完全な冷たい雪の中で死ぬ運命をになっている。F. R. Leavis は雪から死へと連想される点において, この小説は Niblungs の北歐伝説の影響があるとみている⁸⁾。一方, Mark Spilka はこの northern ice-destructiveness に文明の崩壊の意味も含まれているとする⁹⁾。すなわち, それは機械文明において, 人間がじょじょに機械の部分品となっていくことを意味する。

では, なぜ, 彼がそのような運命を辿らねばならなかったか。第一の原因として考えられるのは, 彼および彼の家族が死にとりつかれた家庭であることである。彼は幼年時代に誤まって弟を殺し, カインの烙印を押されていること¹⁰⁾, 手を怪我しながらも, 妹を助けようとしてできなかったこと¹¹⁾など

6) D. H. Lawrence, *Women in Love*. p. 9. (London, Heinemann, 1961)

以下 *Women in Love* は WL と称略する。

7) WL, pp. 246—7.

8) Cf. F. R. Leavis, *op. cit.*, p. 169.

9) Cf. Mark Spilka, *The Love Ethic of D. H. Lawrence*, pp. 134—5 (Bloomington, 1955)

10) Cf. WL. p. 42.

11) Cf. *ibid.*, “Water-Party”

があげられる。

第二の原因としては、彼が炭坑の経営者であり、機械文明の信奉者であったことがあげられる。彼は現代産業を象徴し北極の風物のような純粹さを持っている。これは文明を破壊するものであり、人間の存在を産業主義計画の中の一つの歯車と化したものである。**Gerald** は人間の意志こそ、絶対的なもの、唯一無二なるものであると信じていた。

彼の炭坑経営の方法を彼の父の方法と比較してみよう。**Thomas Crich** は自分の事業は愛を基調として経営されるべきだと考える。キリスト教的平等で事業を行おうとする。けれども万人と平等になろうとする心と、偉大なる事業家として自分の財産を維持し、権威を保たねばならぬ心とが矛盾し、そのために苦しむ。

一方 **Gerald** はキリスト教的平等ということを全然意に介さなかった。愛と自己犠牲のキリスト教的態度は古帽子にすぎない。問題になるのは、大いなる社会的な生産機械のみである。それを完全に働かせればよい。**Gerald** はこの機械を動かす神であった。そして彼の考えによると人間の全生産意志には神性が宿っているのだ。

さらに “**In the Train**” における **Birkin** と **Gerald** の会話に **Gerald** の生きる目的があらわれている。

“Tell me”, said Birkin. “What do you live for?”

Gerald's face went baffled.

“What do I live for?” he repeated. “I suppose I live to work to produce something, in so far as I am a purposive being. Apart from that, I live because I am living.”¹²⁾

Gerald は働くこと、何かを生産することを生きる目的としている。彼は機械文明によって支えられている。しかし、**Birkin** は **Gerald** をこのことによって憎む。

12) WL. p. 48.

Vivas は Gerald と gamekeeper のタイプの人物とを次のように比較している¹³⁾。gamekeeper のタイプの人物とは *Lady Chatterley's Lover* に出てくる Mellors である。彼は生命の泉、優しさで満ちあふれている。一方 Gerald のタイプの人物は機械文明の信奉者であり、性的無能者であり、墮落の要素を持っており、自他ともに破滅に導くのである。

Gerald は炭坑王として、すべてを自分の意のままにしてしまうと、漠然とした空虚感に襲われた。自分の顔を鏡にうつしても、どこか非現実的で、仮面のような感じがした。それは一種の緊張状態であり、自分のうちに平衡感がない。彼は動力を断たれた機械のように、無気力の苦しみにとりつかれてじっとしていた。自分を生かし慰めるためには、次の三つの方法しか残っていなかった。一つは hashish を吸うこと、次に女性、それから Birkin に慰めてもらうことであった。

(3)

次に Gerald の女性に対する態度をみていこう。彼の冷い意志は機械の支配という面では成功したが、それが恋愛という対人関係ではどう作用するであろうか？

彼は女性を求める時、憎悪や心の中の緊張、不安を sex の中に発散させた。彼は魂の空虚さを満すために女性を求めたにすぎない。Minette もそういう女性の一人だった。彼女達は Gerald の意のままになる女性達であり、Gerald にとって、道具にすぎなかった。

しかし、彼は Gudrun との恋愛によって、新しい恋愛探究に向ってゆく。“Sketch-Book” の章で、Hermione にくってかかる Gudrun を見て、この女はどんなことがあるとも、全然妥協を許さず、決して挫かれない危険な敵意に満ちた精神を持っていることをはっきりとみてとったのである。それはすでにゆるぎないものとして完成しており、一分の隙もない態勢を整えてい

13) Cf. Eliseo Vivas, *D. H. Lawrence, The Failure and the Triumph of Art* pp. 240—241. (Northwestern Univ. 1960)

る。「この女は自分にとって、現実の世界を意味する。相手の水準までたどりつき、その期待を満したい。」と思った。

Gudrun と Gerald との恋愛は一对の秤皿のようなものである。一方があがると、もう一方は無限の空虚へと、どんどん下ってゆく。どうにかして均衡を取り戻さねばならない。それには自己を無に帰せしめることによって、他に従属するのである。どちらも ego を保ちながら、独立したものとして、結びつくのではなく、一方が ego を無にし、他方の権力に従属することによって結びつくのである。Lawrence は次のように述べている。

He scarcely ever left her alone, but followed her like a shadow, he was like a doom upon her, a continual 'thou shalt', 'thou shalt not'. Sometimes it was he who seemed strongest, whilst she was almost gone, creeping near the earth like a spent wind; sometimes it was the reverse. But always it was this eternal see-saw, one destroyed that the other might exist, one ratified because the other was nulled.¹⁴⁾

このような「権力意志」の実現は Lawrence が嫌う近代的な恋愛の姿である。

では Lawrence の望んだ理想とする愛とはどんなものか。Ursula が「愛はすべてであり、完全な自己放棄をもって自分を愛してくれなければならない。」¹⁵⁾ というのに対して、Birkin は「神聖な愛という感情は、現代では俗悪化され、口に出すのものはばかられている。」¹⁶⁾と考える。そして「愛がすべてだ」という考えはセンチメンタルな合言葉にすぎないと非難する。そして、Birkin は愛よりも新しく、もっと良い考えとして、Adam が Eve を自分に結びつけておき、永遠のパラダイスを感じさせることができたような均衡状態、すなわち、二つの星が対等に均衡を維持しながら、交会するという star-equilibrium の思想を述べて、Ursula の「愛がすべて」という意見を追い放そうとする。Lawrence は次のように述べている。

14) WL, p. 436.

15) Cf. *ibid.*, p. 144.

16) *Ibid.*, p. 122.

“What I want is a strange conjunction with you——” he said quietly; “——not meeting and mingling;——you are quite right:——but an equilibrium, a pure balance of two single beings:——as the stars balance each other.”¹⁷⁾

Mark Spilka の意見によると¹⁸⁾, Ursula の愛についての考えは、男と女は一個体の、ただ破れた断片にすぎないという古い説によるものである。ところが Birkin は男と女は原初的結合から、純粋な個性へと摘出されたたと主張する。したがって、男女は愛に没入するよりは、むしろ極性を与えられなければならない。ここに *star-equilibrium* の思想が生じる。

では Gerald と Gudrun との結婚観について考えよう。25章では結婚は Gerald にとって、Gudrun との結合関係に身をゆだねることではなく、既成の世界を受け入れること、結婚はそこに身を投ずることを意味する。地下世界の住人たるべく宿命づけられた罪人のように、日光のもとには生を受けず、恐るべき地下の活力をもとうとする。Gudrun は「人間は自由でなければならない。結婚して一家を構え、その中に入れられるなんて、とても我慢できない。」¹⁹⁾ と考える。

Gerald の結婚観は近代人が考える概念である。Lawrence はこの思想に反駁して *star-equilibrium* を唱える。彼はこれを Birkin と Ursula との間で完成する。

さらに結婚に付随して、男同志の結合も必要だと考える。

Birkin は Gerald に *Blutbrüderschaft* の誓いをすることを求める。これはお互いの腕に小さな傷をつけ、その傷口に互いの血をこすりつけ、互いに一つの血、全生命のもとに真実であることを誓いあう。Gerald はこの申し出をことわる。この男同志の結合については、さまざまな意見が批評家によって述べられている。J. Middleton Murry は「この関係は Ursula と Birkin

17) WL., p. 139.

18) Mark Spilka, op. cit., p. 126.

19) Cf. op. cit., p. 366.

との関係の失敗から男性へ逃避したものとみている。]²⁰⁾また同性愛ともとられるが、ここでは Birkin が Gerald に友情を熱望したものとっておきたい。けれども Gerald はこれを退けた。以下、Gudrun との恋愛を通して、Gerald のあゆんだ道を追ってみたい。

(4)

Gudrun にとって、最初 Gerald に惹かれた原因は、彼が大炭坑の経営者であり、何ものにも屈しない、強い意志力であった。二人は最初の接吻を炭坑鉄道の橋の下です。そこは若い炭坑夫達が恋人を自分の胸に押しつけたところだ。Gudrun は「炭坑夫全体の支配者が私を胸に押しつけている。」²¹⁾と満足感を味わう。

“Diver” で Gerald が自然界を水を切って泳いでいるのを見て、Gudrun は彼の自由を羨ましく思う。彼女は彼の好きなことができうる境地に憧れる。それに対して、彼女はまったく制限された女である。しかし、実際に制限されているのは、彼の方であり、二人の恋愛の発展段階において、彼女は彼の欠点をさらけ出して、彼を死へと導いてゆく。

“Diver” においては水をのりきり、わがもの顔に泳いだ Gerald も、“The Water-Party” において、溺れた妹を助けようとするが、失敗する。「彼は法律上、妹の溺死に関しては責任はない。しかし、炭坑経営において、自然条件と戦って、自分の意志を押し通した Gerald を考えてみよう。Water-Party の水は炭坑経営における自然条件よりは、責任の軽いものである。それゆえ、彼は水に対して責任を問われる。」²²⁾

さらに“Coal-Dust” になると、彼の征服欲に残忍な危険なものが感じられる。Brangwen 姉妹が踏切のところで待っていると、Gerald が馬に乗ってやってくる。馬は機関車の音に驚いて逃げようとする。Gerald は強い意志力

20) J. M. Murry, *op. cit.*, p. 119.

21) WL, p. 323.

22) Cf. Vivas, *op. cit.*, p. 231.

で馬を抑え、ついに馬は出血しながら抑えられる。それを見ていた Ursula は激しく彼をののしり、止めようとする。Gerald が残忍な野蛮性と強固な意志を持っていたのに対し、Ursula は「優しい生命の源泉」であることを述べている。

Gerald と Gudrun は普通の意味では結婚しない。二人の結婚は“Rabbit”の章で象徴的に表現されている。兎を鎮めようとして、Gudrun は兎にひっかかれ、それを助けようとした Gerald も兎にひっかかれ、裂傷を負い、血を流す。Vivas の意見によると、²³⁾ この場面によって、兎を仲介として、Gerald と Gudrun との結婚の儀式とする。この結婚式の証人が Gerald の妹である。この場面にみられるように、二人の関係は激しく残忍なものである。Gudrun の方が一見、弱そうに見えるが、二人の関係では機械文明の支配者である Gerald の方が弱者であることが次第に暴露してくる。

Gerald が Gudrun を求めた原因のひとつは、何もかも機械化してしまった後、自分の心にできた空虚感を満たすためであった。

しかし、二人の関係が親密になってくるのは“Death and Love”の章である。Gerald は病気の父を看病し、その後父の死にあう。父の死による激しい空虚感と疲労感のため、孤独に陥る。そして、その苦しみから逃れるために、夜道を Gudrun の家へと向う。Gudrun の家に忍びこみ、赤ん坊が母の暖かみとミルクを求めるように、Gudrun を胸に抱いた。彼女は彼の恋人となつたのではなく、泣き叫ぶ子供の夜のおもりとなつた。それにおいて、男は完璧で強力で英雄的な存在となり、女は服従する。そして疲れはて、痛み、消耗し、早く解放されればよいと願う。

Gudrun が Gerald を本質的に憎んだのは、Gerald の生における熱情的な目的の欠如である。彼が女を求めるのは空腹のあまり泣き叫ぶ赤ん坊が母親の胸を求めるように求めた。これが Gerald の情熱の、女に対する抑えがたい欲望の秘密だった。言はば自分を眠らせ、自分を休息させるために女を必要とした。

23) Ibid., pp. 245—6.

Gudrun によって知った母を求める子としての体験は Gerald の心に大きな傷をつけることになる。Gerald は Gudrun を独りにしておこうとせず、影のようにその後を追い、Gudrun を激しく求めるようになる。それについては次のように Lawrence は述べている。

A strange rent had been torn in him; like a victim that is torn open and given to the heavens, so he had been torn apart and given to Gudrun. How should he close again? This wound, this strange, infinitely-sensitive opening of his soul, where he was exposed, like an open flower, to all the universe, and in which he was given to his complement, the other, the unknown, this wound, this disclosure, this unfolding of his own covering, leaving him incomplete, limited, unfinished, like an open flower under the sky, this was his cruellest joy.²⁴⁾

ここに到っては、Gerald は完全に女性の犠牲者となり、その傷口に残酷な喜びを感じている。その後、Gerald はめったに女をひとりにしておこうとせず、影のように、そのあとにまつわりついてた。男が強い時には女は無力になり、またその逆のこともある。永遠の seesaw game である。

“Continental” において、Gudrun は Gerald の異なった面を発見する。Gerald が女性の上におよぼす魅力をみつける。すべての女性は彼の意のままになりたがる。Gudrun は Gerald を50羽の雌鶏を従えた雄鶏だと思った。彼女は Gerald の中の Don Juan なんかに興味を持たなかった。彼女は Don Juanta を彼が演ずるよりもずっと、上手に演ずるであろうから。

Hohenhausen の駅に着いた時、Gudrun はいきなり、雪の上を走り出す。Gerald はそれをじっと見守っている。女は己の運命に向って驚進し続け、男を置きざりにしようとしているらしい。雪世界の中で展開される Gerald と Gudrun の愛の葛藤は緊迫した雰囲気をもって描かれている。この場面の雪は残酷、厳しさといったものをあらわしている。

24) WL, p. 437.

Gudrun は眠っている Gerald を見ながら、夢想に耽る。

Her heart beat fast, she flew away on wings of elation, imagining a future. He would be a Napoleon of peace, or a Bismarck—and she the woman behind him. She had read Bismarck's letters, and had been deeply moved by them. And Gerald would be freer, more dauntless than Bismarck.²⁵⁾

意志力と現実を理解する力をそなえた Gerald は、きっと、いつかは欲するとおり、産業組織そのものを再編成してのけるだろう。そういう組織全体における一つの器械として、この男はたしかに賛うべき存在だった。この男はただどこかにひっかかりをつけてやればよい。自分が紳になってこの男を道具のように使いこなせたならばと思う。けれども、恐るべき cynicism が風のように吹きこんできて、女の上に襲いかかる。「なんのために？」という皮肉な問いが起る。

二人の関係が決定的になるのは Loerke の出現によってである。彼は Gerald にはない精髓を備えたような人物である。Gudrun は世のいわゆる紳士だとか、大学の正規の課程を終った男だとか、そういった男達には、何の興味も持たなかった。ところがこの泥沼に育ったものに対してはある種の強烈な同情の念が湧きあがってくるのだった。彼女はこの男の素晴らしい理解力、自分の生の動きを理解してくれる能力とでもいったものを感じとっていた。彼女は Loerke と急速に親しくなり、Gerald と離れてゆく。

Gerald から Loerke へと彼女が向う過程は次のように描かれている。

Gerald had penetrated all the outer places of Gudrun's soul. He was to her the most crucial instance of the existing world, the *ne plus ultra* of the world of man as it existed for her. In him she knew the world, and had done with it. Knowing him finally she was the Alexander seeking new worlds. But there *were* no new worlds,

25) Ibid., p. 408.

there were no more *men*, there were only creature, little, ultimate *creatures* like Loerke. The world was finished now, for her.²⁶⁾

彼女は **Gerald** を知ってしまうと、新しい世界を追求する。**Gerald** の粗野な攻撃が立ちいることのできないところに、**Loerke** の昆虫のような、繊細な、迎合するような理解力があつた。

Gerald は自分の限界のうちに低徊して、死のどんづまりに追いつめられてしまった。彼は古びた製粉小屋で永遠に粉をひいているより他に能はない。しかもその臼の間には穀物がなくなっている。

Gudrun は **Gerald** との激しい恋愛の後に彼を捨てる。彼女の行為は **Vivas** の意見によると、²⁷⁾ 交尾期の昆虫の雌雄の関係と類似している。昆虫の雌は交尾中に、いや、交尾後にさえ、雄を殺すといわれている。この作品においては、明らかに、強力な産業支配者である **Gerald** の方が、二人のうち、弱者であり、**Gudrun** はそれを最初から知っている。

Gerald は **Gudrun** に対する恐い依存のため、耐え切れなくなる。彼女を殺すことによって、その束縛から逃れようとする。彼は **Loerke** と彼女がいるところへ行き、彼女の首を締めてから、スキーで上へ上へと登ってゆく。途中で雪に埋まったキリスト像をみて、誰かが自分を殺そうとしていることに気付く。このキリスト像について、**Mark Spilka** は次のように述べている。

「このキリストは北方の氷の冷たさの上に君臨するものである。そして、おそらく、彼は *Aaron's Rod* や他の作品のキリストのように自分を裏切るユダを欲しており、殺害されることを望むキリストである。ちょうど **Gerald** が自分の喉を切られることを欲しているように。」²⁸⁾ **Birkin** は **Gerald** について、「殺害者を恐れている人は深くそれを望んでいる。」²⁹⁾ と言っている。

このキリスト像は **Mark Spilka** の意見のようにも考えられる。**Gerald** は

26) Ibid., p. 443.

27) Cf. *Vivas*, op. cit., p. 252.

28) Cf. **Mark Spilka**, op. cit., p. 142.

29) *WL*, p. 196.

たえず死の影におびえていたからである。けれども、ここでは、キリスト像は現代機械文明の産物であり、精神的世界を象徴するものと考えたい。それは生の根源を破壊するものである。機械文明の支配者である Gerald はその犠牲となる。

アルプスの雪の中で、Gudrun を締め殺したと考えた Gerald は雪の中をさまよって死ぬ。彼の死顔を見て、Birkin は “He should have loved me.”³⁰⁾ と叫ぶ。

(結 論)

今まで Gerald について、その死に到る過程をみてきた。この小説における批評として、F. R. Leavis は J. Middleton Murry の Lawrence の個人的な体験という意見に対して、「現代文明の病巣があらわれている。」³¹⁾ と反駁している。

Mark Spilka は Gerald を産業文明の完全な器械として描写し、人間が人生における文明の現実面を通過することができる最大限のものとして、彼の発展をみている。³²⁾

Gerald は今まで述べたような諸説を含んだ人物である。Lawrence 自身の愛の体験も含まれているし、現代文明に触れた現代人の姿も反映している。けれども Gerald に深く共鳴を感じるのは、彼が20世紀の我々を代表する人物であるからである。Gerald——その姿は現代文明の行きつく先を暗示しているように思える。

Gerald を死へ追いやったものは、彼の Gudrun に対する恐しいばかりの依存性も一因である。

それと共に、人間でありながら、機械の神となり、支配者として、君臨した行為も考えられる。自分の規準で物をはかり、自然に挑もうとした強固な

30) Ibid., p. 471.

31) F. R. Leavis, op. cit., p. 174.

32) Mark Spilka, op. cit., p. 134.

意志も、Gudrun との恋愛においては挫けざるをえなかった。彼には Birkin のように自然に対して、もっと謙虚になる気持ちが欠けていたのではないだろうか。Birkin は自然と人間との関係について、次のように考える。

Whatever the mystery which has brought forth man and the universe, it is a non-human mystery, it has its own great ends, man is not the criterion. Best leave it all to the vast, creative, non-human mystery. Best strive with oneself only, not with the universe.³³⁾

Gerald の悲劇は人間でありながら、神にとってかわろうとしたところにある。神は人間なしでもなしうる。人間が規準ではない。けれども Gerald の犯した過失は、日毎に進歩する近代文明の中で、我々が犯しがちな誤りでもある。

Birkin は Gerald の死顔を見て、“He should have loved me.” と叫んだ。Birkin の提案した男同志の結合を受け入れていたならば、事態は変わったであろう。おそらく、Gudrun にあれほど依存しなくてもすんだかも知れない。けれども、この作品では、その分野は未知数のままに残り、その解決は *The Plumed Serpent* を待たねばならない。

Lawrence は Birkin と Ursula における star-equilibrium という思想を理想としていた。それはあまりに抽象的でわかりにくい。それよりも、この作品においては、Gerald の方に迫力があり、訴えるものがある。第一節で述べた Murry の「*Women in Love* においては Birkin と Ursula が中心であり、その他の人物は補助的である。」という意見はあてはまらないと思う。

Ursula は「無意味に機械的に生きるよりはむしろ死の方が良い。死は未知のものへ従うことである。」³⁴⁾ と考えた。ここに最初に述べた Lawrence の「私の主題はダイヤモンドの炭素なのです。」という説が想起される。ダイヤモンドの炭素とは、つきつめたところ、生か死である。Lawrence は Gerald

33) WL, pp. 469—70.

34) Ibid., p. 184.

を殺すことによって、無意味に空虚な心を抱いて、生き続けることよりも、
いっそう意義あるものにしようとしたのではないだろうか。Gerald は死ぬ
ことによって、全ての登場人物の中で一番いきいきと我々の心に生きてい
るのである。